

海外出張報告

JICA ADC2 ラボネット会議：第1回カンボジア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、タイ、ベトナム中央ラボ所長会議

出張期間：平成22年7月11日～14日

出張場所：マレーシア国立獣医研究所

TAGAWA Yuichi

研究管理監 田川 裕一

YOKOYAMA Takashi

プリオン病研究チーム チーム長 横山 隆

[用務の内容]

平成22年7月12-13日にマレーシア国イポー市にある国立獣医研究所（Veterinary Research Institute）で開催されたラボネット会議：第1回中央ラボ所長会議に参加した。カンボジア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、タイ、ベトナムの東南アジア6カ国では、各国内ならびに6カ国域内の家畜疾病防除の連携強化と家畜衛生技術の向上を目的として、平成23年2月までの3年間、国際協力機構による家畜疾病防除計画地域協力プロジェクト（フェーズ2）（JICA ADC2）の取り組みが進められている。今回の会議は各国の家畜疾病診断を担当する中央機関（中央ラボ）の長が集まり、JICA ADC2プロジェクトに基づいて構築されつつあるネットワークの継続と発展を目指して意見交換を行い、今後の取り組みを明確にするために開催されたものである。動物衛生研究所に対しては、これまでに各国中央ラボへの技術支援の実績を持つとともに、現在も技術支援に関する要望が高いこと、また、国際獣疫事務局OIEのコラボレーティングセンターとしてアジア地域の家畜疾病防除を支援する立場からの参加の要請があった。

本会議へはカンボジア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、タイ、ベトナムの各国中央ラボ、国連食糧農業機関アジア太平洋地域事務所（FAO RAP）、動衛研、JICA-ADC2地域プロジェクト事務局およびJICAマレーシア事務所から計22名が出席した。会議では、地域内での家畜疾病に関する情報の共有化と疾病診断技術の向上を図っていくためのネットワークの継続と発展のあり方について検討が進められ、以下のことが確認された。

1) 地域内の家畜疾病診断に関するさまざまな問題

の解決を図るための協議を進めるうえで、本ネットワークが重要な役割をもつこと。

2) 本会議を定期的に協議の場を設けていくフォーラムと位置づけて、今後も継続して開催していくこと。一方で、フォーラムの継続のためには、JICA ADC2プロジェクト終了後の開催経費の確保を目指す必要があること。

3) なお、本会議での意見交換を通じた各国代表の合意内容の主な点は以下のとおり。①次回以降は各国の中央ラボが持ち回りでフォーラムを主催し、ASEAN加盟国であるブルネイ、シンガポール、インドネシアおよびフィリピン、また、動衛研、OIEおよびFAOからも関係者を招聘する。②フォーラム参加国間の家畜疾病に関する情報共有が重要課題であることから、情報共有のための通信手段を確保しておく必要がある。フォーラム事務局（次回開催担当中央ラボが担当）は情報共有を積極的に進めること。③診断液や資材の共有は今後とも継続が必要であり、そのための役割分担、資金提供者や方法についての具体案を準備する。④JICA ADC2プロジェクトで実施してきた地域内専門家の派遣活動は有益であったことから、継続のための資金や方法について協議を進める。⑤検査室診断技術のプロトコル等については、域内での共通化が必要である。OIEマニュアルへの準拠を考慮しながら、優先疾病として口蹄疫、豚コレラ、高病原性鳥インフルエンザについてプロトコルの共通化を進める。⑥診断能力の向上とともに、バイオセーフティとバイオセキュリティが重要な課題であり、今後整備していく必要がある。病原体のクラス分け、バイオセーフティ訓練、助言を与えるための地域内バイオセーフティ

チームの設立、さらに個人防御用具や消毒薬の供給などの検討を進める。

なお、本会議において動物衛生研究所からは以下の2つの話題を提供した。

1) 動衛研の現在および今後の家畜疾病防除に関する活動について (田川)

日本の家畜疾病防除システムにおける動衛研の役割と活動について説明するとともに、本年(2010年)5月に動物医薬品検査所とともに、アジア地域における家畜疾病防除と動物用医薬品の品質管理に関するOIEコラボレーティングセンターとして承認されたことを説明し、本会議の参加国からの今後の活動への協力を要請した。

2) リファランスラボラトリーの役割について (横山)

OIEリファランスラボラトリーの活動の概要とともに、当研究所のBSEに関するリファランスラボ活動の状況を説明し、併せて馬伝染性貧血と豚コレラのリファランスラボが活動していることを紹介した。

[所感]

JICA ADC2プロジェクトの取り組みを通じて、参加6カ国域内の家畜疾病防除のためのネットワーク構築が進められている。参加国の間では専門家派遣や資材等の供与が行われており、6カ国の協力の下で、家畜疾病防除を進めていくことが必要という意識が共有され、活動推進に向けての連携・協力関係の構築が進められている。一方で、参加国の技術レベルには依然として違いがあることは否めない。地域内の提供側と受取側の差を縮めていくための道程はまだかなり遠いと感じた。さらに、JICA ADC2プロジェクトに携わってきた関係者の努力によって構築されたネットワークは、継続的に機能してこそ大きな意義が見出される。プロジェクト参加国自らが当事者として、ネットワークの継続のために具体的な方針を策定していくという大事な作業は今始まったばかりである。ネットワークの永続性をいかに達成していくのか

が、このフォーラムの最も重要な検討課題となる。

東南アジア地域では、これまでにさまざまな家畜衛生に関するJICAプロジェクトが実施され、動衛研はその技術協力を支援してきたことから、動衛研の存在についてはかなりの程度認知されている。一方で、この地域に対しては他の先進各国からも家畜衛生に関する多大の支援が行われており、日本あるいは動衛研の存在感が低下の傾向にあることは否めない。特に若い世代では技術協力のカウンターパートとしての経験が乏しいため、世代交替に伴い、日本や動衛研の存在感はますます低下していくものと懸念される。今まさに、この地域においてOIEコラボレーティングセンターとしての活動に積極的に取り組んでいくことがこれまでに築き上げてきた信頼と協力関係をつなぎとめ、さらに発展させていくために必要となっている。第2回中央ラボ所長会議の開催が来年(2011年)2月のJICA ADC2プロジェクト終了前までに予定されている。アジア地域の家畜疾病防除に向けたOIEコラボレーティングセンターとしての活動を進めていく上で、フォーラム参加6カ国との情報交換は重要であり、第2回以降の動衛研の参加についても歓迎の意向が示された。次回の会議までには、OIEコラボレーティングセンターとしての具体的な活動案の検討を進め、提示できることが望ましい。フォーラム参加国で構築されつつあるネットワークの継続と発展は、アジア地域の家畜疾病防除を円滑に進めていくうえで重要であることから、動衛研がどのような形で支援していけるかを検討していく必要がある。

